東京、２００２年2 月3 日

親愛なる０ エ、

日本人が一人称で話をすると、断定文を「 が」や「 けれども 」あるいは「 けど 」のよう な前置詞で終える。それをフランス語に訳すと 「 mais」と 訳せる。
「 mais」これはなんと 美しい態度だろう 。

そして日本の文化全体を予見させるような態度だ。アジアのはるか端の島
の言葉。 つつましさから何事をも断定せず、この何気ない言葉を文章の最後につけることによって全てを取り下げる。

とはいえ、西洋人である僕はこの「けれども」のあとに続く文章を待ってしまう。
けれども、なに？
けれども何もない。
ただ、宙に浮いているだけ。

今言われたばかりのことに意味が怒濤のように押し寄せ、相手に到達した時には宙づりの沈黙となる。
突然、相手に到達しきらないまま、自分を守る、日本人の孤立、気づかいの孤独。

自我なくして話をする、それは一方的に述べること？

サミュエル・ベケットのことが頭に浮かんでしまう。ベケットは「名付け得ぬもの」の中で、「そう、私の人生、そう呼ばざるを得ないもの、の中で、3つの事があった：黙ることができない。しゃべることができない。そして孤独、もちろん肉体的な孤独。それらの中でぼくは何とかしてきた。」と語っている。

誰もそこにいない会話。周りをぐるぐる回る対話、周辺だけをなぞる交流。
ラテン系の人間、西洋から来た人は（ここでは「洋」と表される。「海」を意味する漢字だ[1]）生来アゴラの市民であるのに対して、日本人は目上の人の前で腰が低く、西洋人が正当化するこの自発性をうまくすり抜ける。

フランス語は外交的な言語だと良く言われる。礼儀作法の心得のあるフランス語を
話す人は何らかの攻撃的態度に応える方法として、極端に丁寧な表現を使うこと
がある。（その丁寧さが攻撃を隠し、極端であることで、攻撃していることを誇
示する）。

日本語は天子の言葉。丁寧というよりももっと儀式張ったもの。話し
ている内容とはほど遠く、聞いている内容をおし隠す。まるで紫式部が屏風の後ろで、兄弟が受けている教えを漏れ聞いているようだ。

心から、

Copyright©Eric Van Hove - all rights reserved

1　多分、オランダ船と の最初の出会いの場所だったのだろう 。海は人気のない場所だが、風がひっきり なしに吹き 渡り 、恐ろしいほどに動きがある 場所でもある。これ以上に「 別の人」（ 別の言語を話す人）をう まく 表現する 言葉があるだろうか？